

詳細すぎるダニエルの預言

聖書の信憑性について

ダニエル書 11章 第2部

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



皆さま、こんばんは。私は今、本の執筆に取り掛かっています、一応 12月発売予定なんです。タイトルは『世界は聖書でできている』に決まると思います。なぜこんなに長いタイトルにしたかということ、日本語はある区切りをもって話すと、すごくリズムカルになるんですね。

三三五、四四五、五七五は、日本語がスパッと入っていくリズムなんですよ。

「世界は 聖書で できている」「生麦 生米 生卵」「でんでん むしむし かたつむり」「やってて よかった 公文式」「亭主 元気で 留守がいい」「世界は 聖書で できている」と。ちょっと読みたくなっちゃったじゃないですか。

ぜひ皆さんに助けていただきたい。というのは、非常に売れ行きがよければ、いいことが起こるんです…第2弾が出るということですよ。

私としてはまだまだ語り切れてないところがあるので、文書を通して、聖書の真実についてお話ししたいという願いがあります。

この本の中身はズバリ、「聖書は預言の本である!」「宗教の本なんかじゃないよ。聖書が語っていることばは、100%全て実現する神のことばだよ」なんですね。

時々「この人も預言者です」「これも預言の本です」「この人も預言して当たりました」っていうの、あるじゃないですか。

その当たったという時、よく検討しなければならないことがあるんですよ。

めちゃくちゃ多弁の預言者というか、たくさん話してたら、1個か2個当たることはあると思います。これは、聖書が言う預言の基準に合わないんですね。

100言って1つか2つ当たって、「これは預言です。すごい!」って…。

皆さんの隣人で100のうち真実が1つか2つしかない人、信用しますか?

そんな奴はおらんと。でも、こと預言になってくると、そのように持ち上げられることがあるんです。

聖書が語っているのは、百発百中でないとアウト!語られた言葉の中で1つでも実現しないものがあるなら、それは偽預言者だ!聖書で見るなら糾弾の対象です。

聖書預言は、神が語ったことばは、100%全てことごとく成就する。実現してきた。なので、神のことばなんだ。

ところが、あまりにも細かいところまでの中しすぎていると、「こんなん、あり得へんで」「預言じゃなくて、後から書いたやろ」と言う人が出てくるんですよ。

前もって書いたことばの中でいくつか当たってるなら、まあまああり得るかもしれない。でも、あまりにも細かいところまで、正確すぎるほど全部実現しているとい

うのは、これはあり得ない。古い紙を持って来て、前々から書いてありましたみたいな演出してるんじゃないですか、という。

特に、今日見るダニエル書 11 章はそれなんです。そのとおりのことがめちゃくちゃ細かく書かれていて、正確に当たっている。

近代批評神学の、「聖書は神のことばではない」と言いながら、しかも聖書でご飯を食っている学者がいるんですね。神を信じていない、自称クリスチャンというか聖書学者たち。どういうわけか、世の中ではそういう人たちの本が売れるんですよ。あまりにも聖書のことを、現実のことをご存じないからだと思うんです。だから『世界は聖書でできている』、ぜひ買っていただきたいと思います。

今日のサブタイトルは聖書の信憑性について。聖書の信憑性は預言の実現で立証できるということで、ダニエル書 11 章は細かいところまで語っているのに、こんなに細かいことまで当たっているのは作りもんやからと言っている。そうじゃない。

聖書は旧約聖書と新約聖書に分けられますね。

旧約聖書の最後はマラキ書で、BC430 年ごろに書き終わられたと言われています。マラキ書から新約聖書のスタートまで、旧約と新約の間の 400 年間は、預言者が全く出てこない時代なんですね。この空白時代を中間時代と言います。中間時代は預言者は出てきていないし、聖書は一切書かれてません。

なぜそれが分かるのか。中間時代に書かれた『マカバイ記』という歴史文書があります。『マカベア記』と言う人もいます。

これは BC200 年ごろに書かれたもので、聖書ではありませんが、BC200 年ごろのユダヤ人たちが何を憂い、何を考え、どういう行動していたかを知る資料として非常に貴重なものです。

その『マカバイ記』の中に、「こんなに長い間預言者が出ていないことについて、ユダヤ人たちは悲しみに暮れている」と書いてあるんです。

つまり、BC200 年の段階で聖書の預言者が出てこないのは、聖書はそれ以前に完結しているから出てこない。

『第二バルクの書』という、これも BC200 年ごろに書かれた文書があるんですが、その中には「預言者、寝とるんかい」みたいなことが書いてある。

つまり、「私たちは神のことばを新たに聞きたいと思っているのに、旧約聖書の預言者がピタッと出なくなっ、長い時間が経ってます」と言ってるんですね。

長い時間って、BC400 年から止まっているんですよ。

BC400 年までに書かれた聖なる文書のことを正典（せいてん）と言います。

青天の霹靂（せいてんのへきれき）ではないですよ。正しい辞典の典で正典。

カノンという意味です。カノンは元々は葦（あし）。葦はまっすぐになる。

カメラのメーカーのキャノンはこれから取ったんです。キャノンの創設者は観音信

仰者で、その観音と聖書の基準の正しいで、カメラの基準はキャノンだと。
なんで聖書と観音信仰と…この辺が日本ですわ。

ユダヤ人の共通認識は、「マラキ書までが聖書。それから先にいろんな歴史文書や
注解書やラビたちの解釈本が出てくるけど、正典としてはマラキ書まで」
少なくとも、BC200年の段階ではそう信じられていました。

ダニエル書は、BC400年の段階で完成しているカノン正典の中に入ってるんです。
つまり、ダニエル書はBC200年以前に書かれたということが、ユダヤ人の認識に
よって分かるんですね。

「そなん、ユダヤ人が後で付け加えたかもしれない」ってね、ユダヤ人の聖書に
対する態度や真剣さを知らないから言ってると思います。

私も本を書くに当たって、死海写本を勉強しました。

ユダヤ人は聖書写本をする時、「ヤーウェ」という言葉が出て来たら全身水浴しな
いとダメなんです。ザバツと身を清めて。ある箇所では1行に3回くらい出てくる。
めちゃくちゃ面倒くさいですよ。面倒くさいとか言う人自身がもう不敬虔。

「あなたが聖書写本している時に、絶対権力者である王から呼ばれても、返事をし
てはならない」とか、書き写しの間違いがないようにするために、いろんなことが
書いてあるんです。

例えば、1つの書簡の写本が終わったら、その書簡の中にヘブライ語のアレフが何
回出てきたか、ベイトが何回出てきたか、ギメルが何回出てきたか。

その書簡のど真ん中のヘブライ文字は何か。それは何文字目か。

もう数えることができるものは全部数えていて、病気かみたいな感じ。

徹底してるんですよ。一文字でも欠けたら、すぐに気づけるような工夫をしながら
写本してきたんです。一文字欠けても足しても分かる。

「それは絶対にアウト！」と言っているユダヤ人が、「ダニエル書は後で書いたけ
ど正典の中に入れる」とか、彼らが聖書に対してどれだけ命を懸けてきた民族かを
知らんから、そんなこと言ってるんですよ。

イスラエルはエジプトのプトレマイオス1世に簡単にやられてしまったんですが、
なぜかというと、戦争当日が安息日だったからです。

安息日には一切仕事をしてはならない。敵が来た時に防衛するのは仕事やん。

だから、やすやすとやられた。もうね、こうと書いてあったら必ず守る。

一文字も欠かすことはできない。一文字も加えることはできない。もう厳格に。

それで国が滅んだり、命が失われるとしても、そういうふうを守ってきた太古の時
代のユダヤ人が、「ダニエル書、後から付け足しとこか」って…。

ユダヤ人についてあまりにも無知な学者たちが言ってることですよ。

ついでに言うと、異端ってありますね。いろんな教会が配るトラクト・案内のチラ
シを見ると、「私たちは世界平和統一家庭連合、モルモン教、エホバの証人と関係
がありません」と書いてあります。

この3つの特徴は、聖書以外のものを付け加えてるんです。

僕の友人が大学時代、エホバの証人にグググッと引きずり込まれかけました。彼は昔から、聖書を勉強する機会があれば勉強したいと思ってたんです。ある時、下宿に2人来て「聖書を勉強しませんか?」「僕、聖書勉強したいと思ってたんですよ!」飛んで火に入る夏の虫。「では、毎週やりましょう。私たちの場所でもいいし、訪問してもいいし」「僕のアパートボロボロですけど、来てください」それから毎週毎週4か月間、1週も抜けることなくずっと勉強して、ある1つのことに気がつくんです。

「僕は聖書を勉強したいと言ってるのに、テキストは聖書ではなく『目ざめよ!』だった」『目ざめよ!』は、エホバの証人のことを語っている伝道文書です。

「聖書そのものを順々に学びたいと言ってるのに、あなたたちはこのテキストに基づいていいと取りしてるだけ。なんで聖書そのものを読まないんですか?あなたたちの学習方法は聖書じゃないと思います」クリスチャンじゃない時に見抜いた。

ここの集会はね、聖書をちゃんとやってるんですよ。だから今日は11章の第2部。飛ばそうと思ったら飛ばせるし、ほんま言うと飛ばしたかったんです。もう疲れる。準備するの疲れますねん。だけどね、飛ばしたらあかん。順々にやってるから。

モルモン教は、聖書に関係ない『モルモン経』という別の本を持ってくる。世界平和統一家庭連合は、『原理講論』という別のものを持ってくる。ほかのものを足してくるという段階でアウト!これは絶対にやっちゃダメ!ましてやユダヤ人が、正典の中に入っていないものを、さも正典であるかのように装って、後で付け加えて、それを有り難く信じてるなんて、ユダヤ人と聖書の関係性について知らなすぎると思いますよ。

聖書は文字どおり、額面どおり、神のことばです。
正典/旧約39巻、新約27巻、全66巻。これだけが聖書です。

では、今日の箇所を見ていきますが、月に1回なので復習しておきます。
ダニエル書11章が書かれたのはBC536年です。10章にその年月が書いてあるので分かります。BC536年に10章から12章が書かれました。この3つの章はひと固まりで、10章は前書き、11章と12章は1つの終末預言です。

11章で、やがて、ペルシアを滅ぼす非常に強い王が出てきて天下を取るが、自分の子供にその大きな国を継がせることはできない。
これは、ペルシアを滅ぼしたアレクサンドロス王のことです。
彼はその国を息子に継がせることができず、側近たちによって4つに分かれます。

- ①イスラエルから見て南の国エジプトのプトレマイオス朝
- ②北の国はセレウコス朝シリア。
朝は王朝とか朝廷の意味です。ロイヤルファミリーが王なんですわね。
- ③カサンドロスが統一したマケドニア
- ④リュシマコスが今のアナトリア半島一帯・小アジア。

今日は4つ覚えなくていいんですが、2つ覚えてほしいことがあります。
イスラエルから見て南の国がエジプトのプトレマイオス朝。北の国がセレウコス朝
シリア。このエジプトとシリアの間で争いがずっと続くんです。

この2つに挟まれている小国は酷い目に遭うんですよ。
アフリカの諺に「2頭のサイが喧嘩したら、その地面は荒れる」というのがあって、
強い大国同士が喧嘩したら、その間に挟まれている国は、攻めていく時も攻め込ま
れる時も、いつも往復で縦断されてしまうし、両方がそこを取ろうとするので、こ
っぴどい目に遭うんですね。
エジプトとシリアのちょうど間にあるのが、今パレスチナと呼ばれているユダヤ人
たちの国、ユダヤ人たちが住んでいたところですよ。

南のエジプト／プトレマイオス朝の初代はプトレマイオス1世です。
はじめは、4つに分割された国の中で、プトレマイオス朝が一番強かったんです。
彼はアレクサンドロス大王の遺体を奪取し、エジプトに持ち帰ってミイラにし、当
時のエジプトの中心都市アレクサンドリアに葬りました。
4人がみんな尊敬しているのはアレクサンドロス大王でしょ。その遺体を納めて葬
儀を盛大にやったことで、やっぱりプトレマイオスがいいんかなと。
信長が本能寺で殺された後、だれが葬儀をやりましたか？秀吉ですよ。
それで世間は、「ああ、ポスト信長は秀吉か」と思ったんですよ。
プトレマイオス1世はその意味で、スタートの段階で非常に強いんです。

北のシリア／セレウコス朝の初代はセレウコス1世です。
彼は元々そんなに高い位ではなかった。はじめは影が薄かったんです。
それがどんどん頭角を現していくんですが、あることがきっかけで大バケします。

アレクサンドロスはギリシアを出て、ずーっとインドまで行くでしょ。
そして、「人類文明の最高傑作であるギリシア文明を世界中に広めて、1つにまと
めるんだ」と、コスモポリタンというか、ギリシア人はギリシア人で固まるのでは
なく、混血すべきだという考えを持っていたんです。
それで、アレクサンドロスはペルシアの王女と結婚しました。
そして、自分についてきた全ての部下たちにも、「おまえたちも東洋の王侯貴族の
王女たちと結婚せい！ギリシア人ばかりで固まってたらあかん。世界はコスモポリ
タンになって、ギリシアの文明を世界の標準にするんだ！」と言って、東洋の女性
たちと集団結婚式を挙げさせたんです。文鮮明みたいな。
ところが、アレクサンドロスが亡くなると、みんな離婚。
大王に逆らえないから嫌々結婚したけど、亡くなったからもういいと離婚。

セレウコス1世はほとんど唯一、離婚しなかった人なんですよ。
ほかの部下たちはみんな切っていったけど、セレウコス1世は今のイランから東の
方のペルシアの女性と結婚して、最後まで添い遂げました。
そのことが、彼にとって非常なアドバンテージになります。
やがて、東に向かってセレウコスがどんどん大きくなっていった時、自分たちの口

イヤルファミリーの女性を妻に迎えているということで、現地の人たちがセレウコスを受け入れやすかったんですね。

最初は**プトレマイオス朝エジプト**が強かったのに、あっという間に**セレウコス朝シリア**が大きくなって、ほぼほぼアレクサンドロス大王の帝国を再統一できる一歩手前まで行くんです。地図を見たら分かるけど、ほとんどセレウコス朝シリアですわ。**セレウコス朝シリア**が大きくなっていけばいくほど、**プトレマイオス 1 世**は「ちょっとまずいな。このまま行けば呑み込まれるかもしれない」と心配しだすんです。

エジプトの歴代の王は数えるのがすごい楽。プトレマイオス 12345678910…。次の**プトレマイオス 2 世**の正式な名前はプトレマイオス・フィラデルフォス。聖書を学んでいる私たちにも関係しますが、フィラデルフォスには兄弟愛という意味があるんです。アメリカのペンシルベニア州のフィラデルフィア、兄弟愛という美しい名前ですけど。

なぜ兄弟愛という名前なのか。この**プトレマイオス 2 世**は実の姉と結婚したんです。姉と弟の愛で兄弟愛。ええ！それ兄弟愛いうても、全然清くないやん。というか、プトレマイオスの伝統が兄弟結婚なんですよ。プトレマイオス家の最後は誰ですか？クレオパトラですよ。弟と結婚してた。

アレクサンドリアには世界最大の図書館がありました。30 万冊。パピルスからペーパーという言葉ができました。

プトレマイオス 2 世には、貴重な本を収集する趣味があったんです。

「この図書館に収納されていない貴重な古代文書が世にあるだろうか」側近が「ございます。ユダヤ人たちが持っている律法です。彼らが持っている旧約聖書は、昔から非常に権威があると言われていますが、当図書館にはありません。それを収納しても、ヘブライ語なので読むことができません。が、ギリシア語に翻訳するのは不可能ではありません。お父様の**プトレマイオス 1 世**が、安息日にエルサレムに入って捕虜にしたユダヤ人が 12 万人もいます。彼らを自国に帰っていいと解放してやったら、喜んであなたの願いである、旧約聖書をギリシア語に翻訳することに協力すると思います」

それで、イスラエル 12 部族から 6 人ずつ 72 人の学者を集め、ヘブライ語をギリシア語に翻訳しました。翻訳期間が 72 日間だったって、ほんまかな。あまりにも数字が合いすぎているので、その辺はよく分かりませんが。とにかく、新約聖書に引用されている旧約聖書のことばは全部『70 人訳ギリシア語聖書』からなんです。それをやってくれたのが、**プトレマイオス 2 世**ですよ。「あまりにも完璧なのでこれの改定は許さないと、ひと言言ってください」とか、『70 人訳聖書』にはいろいろ伝説・尾ひれが付いてるんですが。

さて、**セレウコス 1 世**の息子は**アンティオコス 2 世**です。**プトレマイオス朝**は 12345…世なのに、**セレウコス朝**の王は、セレウコスからアンティオコスに変わる。それだけでも脳に負担掛かりますよ。

プトレマイオス2世は、ますます強くなるセレウコス朝シリアについて、非常に憂いていました。**アンティオコス2世**がどんどん大きくなっていき、このままではエジプトやばいとなった時、彼はある策略を考えます。

それは、自分の娘で王女のベルニケを**アンティオコス2世**に嫁がせるというもの。そしたら、ベルニケが産んだ子供はシリアの王であるけれど、エジプトのプトレマイオスの血を引くことになる。いわゆる、戦国時代の政略結婚ですよ。

それでベルニケを送るんですが、1つ問題がありました。

アンティオコス2世は既婚者で、すでにラオディケという妃がいたんです。しかし、**プトレマイオス**のご機嫌を取りたいこともあって「出て行け！」と離婚。そうして、**アンティオコス2世**とベルニケに男の子が産まれました。

ところが、**プトレマイオス2世**が死んだ段階で、ラオディケと復縁するんですよ。この背後にはラオディケの政界工作があるんですが、彼女はまんまと妃の座に返り咲いて、ベルニケとその息子を殺します。

だけではなく、**アンティオコス2世**を毒殺するんですよ。

ラオディケのラオは“人間”という意味です。ディケの意味は“正義”ですよ。

もう人も正義もないラオディケ。「よくも私を捨てたわねっ！」みたいな。

殺した夫との間に産まれたのが**セレウコス2世**です。アンティオコス3世じゃない。

6何年かたって、彼ら（北のシリアと南のエジプトの王）は**同盟を結ぶ。和睦をするために南の王の娘（ベルニケ）が北の王（アンティオコス2世）に嫁ぐが、彼女の勢力は保たれず（ラオディケに暗殺されたから）、彼の勢力も続かない。**

ということで、この政略結婚は失敗に終わるんですが、ここから揉めるんですよ。

プトレマイオス2世の後の**プトレマイオス3世**は、殺されたベルニケの実の弟。

「よくも姉さんをやりやがったな！」彼は激怒して、エジプト軍総力挙げて、**セレウコス2世**に大戦争を仕掛けます。結果はエジプト軍の圧勝で、セレウコス2世の時代にセレウコス朝シリアはボコボコにやられました。

7しかし、彼女（ベルニケ）の根から一つの芽（プトレマイオス3世）が父に代わって起こる。そして北の王（セレウコス2世）の軍に立ち向かい、その砦に攻め入り、これと戦って勝つ。

根は同じ出身母体。ベルニケと同じ父母から生まれた弟の**プトレマイオス3世**が、シリアと戦って勝つ。このとおりのことが起こったんです。

この時あまりにも圧勝し、エジプトはシリアの金銀・財宝・偶像から何から全部持って帰りました。それで、シリアは非常に貧しい国に落ちぶれてしまったんです。

8なお、彼（プトレマイオス3世）は彼ら（シリア）の神々を、彼らが鑄た像や、銀と金の尊い器とともにエジプトに捕らえ移す。彼は何年かの間、北の王（セレウコス2世）と関わりを持たない。

肉親が殺されたことの憎しみもあるし、この際勢いに乗ってシリアをボコボコにして、しばらく立ち上がれないようにしようという意図があったんでしょう。

さて、**セレウコス2世**の長男が、セレウコス朝シリアの4代目の王/**セレウコス3世**になりました。「よくも親父にあんなことしてくれたな！」とエジプトに入ったけど、簡単にやられてしまうんですね。体制整ってないのに、無理にエジプトに攻め込んだ。これ指導者としてどうなの？ということで、なんと暗殺されるんです。

セレウコス3世が亡くなると同時に、彼の弟がセレウコス朝シリアの5代目の王/**アンティオコス3世**になります。父・長兄・次男と連続で、エジプトに大戦争を仕掛けていきました。

10 **しかし、その息子たち**（セレウコス3世と、次の王/弟のアンティオコス3世）は戦いを仕掛け、おびただしい数の強力な大軍を集める。進みに進んで押し流すように越えて行き、そうしてまた敵の砦（エジプト）に戦いを仕掛ける。

プトレマイオスは非常に強かったんですね。結局、返り討ちに遭うんです。

11 **南の王**（プトレマイオス4世）は大いに怒って戦いに出て来て、彼（アンティオコス3世）と、すなわち北の王と戦う。北の王はおびただしい大軍を起こすが、その大軍は敵の手に渡される。

南の王は新しい王で、**プトレマイオス4世**です。これは1人の王が戦っているのではなく、エジプトとシリアの間で数百年続いているいざこざを、何世代にもわたって語っている、その預言の部分なんです。

エジプトとシリアには5回戦争があるんですが、そのたびに、間に挟まれているイスラエルは大変な目に遭うんですね。

またしても、シリアはエジプトに敗北する。敗北したんですよ。シリアは短期間に、次から次に、エジプトに叩きのめされることが続くんですね。しかし、ほかのところで戦争に成功するんです。こっちでマイナスだけど反対の方でプラスなので±ゼロで、まあまあトントンの感じでしょうね。

12 **その大軍を打ち破ると南の王**（エジプト）の心は高ぶり、数万人を倒す。しかし、勝利を得ることはない。シリアはほかのところで勝つからです。

13 **北の王が再び、以前より大きな、おびただしい大軍を起こして、何年かの後、大軍勢と多くの武器をもって攻めて来るからである。また戦争する。**

負けても負けても攻めて来るシリアについてこう書いてます。

15 **しかし、北の王が来て壘を築き、城壁のある町を攻め取ると、南の軍勢は立ち向かうことができず、精兵たちでさえ立ち向かう力がない。**

5回目の戦争でシリアが勝つと言うんです。でも、負けたのに、なぜ繰り返し攻め込んで行ったのか。これだけ見ても分からないんですよ。

実は時代が過ぎて、**プトレマイオス5世**になってるんです。

彼は5歳でファラオになります。4世から5世に王権をバトンタッチする時に、うまくいかなかったみたいですね。つまり、国の中がゴタゴタしている。

その時に突っ込んで行ったら、勝てるかもしれない。それで再度入った。

その目論みは成功し、**プトレマイオス5世**の時のエジプト・シリア戦争は、シリアの圧勝で終わりました。

16 そのようにして、これを攻めて来る者（シリアのアンティオコス3世）は思いのままにふるまう。彼に立ち向かう者はいない。彼は麗しい国（イスラエル）にとどまり、自分の手で滅ぼし尽くそうとする。

アンティオコス3世はエジプトに攻め込み、やりたい放題の限りを尽くすんですが、ここでイスラエル／現在のパレスチナ地方全土を支配し、エルサレム神殿もこの段階でシリアの手中に落ちます。ここからエルサレムが荒らされるようになるんです。イスラエルはエジプトの時も苦労したけど、シリアが押さえることによって、もっとしんどい目に遭うんですね。

シリアはエジプトとの中間地点（イスラエル）を取っているので、一気にエジプトまで行こうとなるんですが、不思議なことが起こるんです。

17 彼（アンティオコス3世）は自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意し、まず相手と和睦して娘の一人を与え、その国を滅ぼそうとする。しかし、それは成功せず、彼の思いどおりにはならない。

エジプトに勝って、エルサレムも手中に納めている**アンティオコス3世**が、自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意したのに、まず相手と和睦してと。

まず和睦するというのは、劣勢に立っている方が、優勢な方の猶予を得るためにする戦略じゃないですか。シリアはエジプトに圧勝したんですよ。

圧勝して総力を挙げて攻め入ろうと決意したら、そのまま踏みにじっていくのが流れですよ。

ところがそうせずに、まず相手と和睦して娘の一人を与え、その国を滅ぼそうとする。昔はエジプトがシリアに仕掛けた政略結婚を、今度はシリアがエジプトに仕掛ける。これは解せない。何が起こったのか。

プトレマイオス5世は、このまま一気にシリアがエジプトに来ることを覚悟しました。その時、彼は仲介を強大な国に頼むんですね。ローマです。

この時はまだローマ帝国じゃない。皇帝はいません。共和制ローマの時代ですよ。ローマはポエニ戦争で勝利して勢いに乗ってますが、これから伸びていくのに一番邪魔になるのは、エジプトではなくセレウコス朝シリアだと分かっていた。

エジプトがシリアの手に落ちたら、自分にとってもマイナスです。
そのエジプトが仲介を頼んで来た。ローマは「分かった」と言って、これ以上エジプトに入れないように、シリアの手を縛ったんです。

それで、正攻法でエジプトを落とせなくなったので、自分の娘を**プトレマイオス 5 世**に送りました。この王女がクレオパトラ 1 世。
クレオパトラって何十人もいるんですよ。シーザーと恋仲になった、あのクレオパトラとは別です。そもそも時代が違う。
アンティオコス 3 世の王女クレオパトラ 1 世を**プトレマイオス 5 世**に嫁がせて、骨抜きにして、エジプトを内側からダメにするという方法。

ところが、クレオパトラ 1 世は父の意向どおりには動かず、**プトレマイオス 5 世**を本当に好きになってしまった感じなんです。プトレマイオスはいいい人やったんちゃいます？ そんな無責任な。会ったこともないのに。でも、政略結婚だけど、結婚してみたら案外いい人やわみたいな。そして、父のことも考えてるんです。
「この私が政界工作をして、エジプトを貶めるなんてできない。夫を愛してるし、父も愛している。嫁ぎ先も実家も私には大事」なので、和平工作に邁進して、本当に絶妙なバランスで、「私の目の黒いうちは戦争なんてさせるものですか！」とばかりに、この 2 つの大国が衝突しないように振る舞うんです。

何年経ってもエジプトに謀反の気配がない。戦争の口実を見つけることができない。全然ひっくり返ることがない。
彼（アンティオコス 3 世）は自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意し、まず相手と和睦して娘の一人（クレオパトラ 1 世）を与え、その国を滅ぼそうとする。しかし、それは成功せず、彼の思いどおりにはならない。
娘が父親の意向を知っているのに従わない。「戦争やめて。実家も嫁ぎ先も両方とも大事。2 つとも残ってたら、ギリシアの末裔も残っていいじゃない」
アンティオコス 3 世は苛立って、いったんエジプト攻略はやめます。

次に彼が手を出したのは地中海。地中海には同じギリシアの小国がたくさんあったんです。エーゲ海をはじめとして。それを全部**セレウコス**のものにするなら、海の玄関口を押さえることになる。これは、エジプトを落とすのが簡単になるんですよ。陸路から攻めるのではなく、エジプトの北に広がっている地中海の制海権を握ったら、事実上自分のものになる。それで、地中海に乗り出して行きました。

その時に、ガチコンとぶつかったのがローマなんです。
地中海の小国は共和制ローマに助けを求めました。この時のローマは第二ポエニ戦争に勝ってノッてるんですね。「いつかは**セレウコス朝**をぶっ倒さなあかんと思ってたけど、こんなにも早くチャンスが来たか！」
シリアとローマは何度もガチンコの大戦争をします。
その結果ローマに大惨敗して、**アンティオコス 3 世**は黙らさせられました。

18 それで彼は島々に顔を向け、その多くを攻め取る。しかし、ある指揮官（スキ

ピオ) **が彼に侮辱をやめさせるばかりか、かえってその侮辱を彼の上に返す。**

それで彼は島々に顔を向け、その多くを攻め取る。最初は成功します。
ある指揮官はスキピオ。世界史で大スキピオ・小スキピオって覚えてはります？
スキピオですよ。ローマは大海軍を持ってました。セレウコス朝は元々陸軍国です。
勝てるわけがない。それで大惨敗して、非常にきつい講和条約を呑まされます。
シリアはどここの国とも同盟を結んではならない。今後軍備増強は禁止。今後戦争で
勝っても、その国民を捕虜にして労働力にしてはならない。その上でローマに対し
て莫大な賠償金を払う。「はい」しか言うことができなかった。

でも、ローマへの賠償金を払うにも、戦費がかさんでお金が無い。
アンティオコス3世はどうしたか。セレウコス朝シリアにシュシャンという都があ
って、そこに神殿があるんです。預言者ダニエルのお墓もそこにあります。
そのシュシャンの神殿の金銀・財宝を取り上げて、ローマに賠償金として渡そうと
した時、現地の人たちの烈火のごとき怒りを買って暗殺されました。

19 彼は自分の国の砦に引き返すが、つまずき、倒れていなくなる。

これが実現したんですね。

アンティオコス3世が滅んで、その後はセレウコス4世。
ローマは「親父が死んでも、未払いのままになっている賠償金は猶予しない。早く
払え！」セレウコス4世は非常にプレッシャーを掛けられました。
そのため彼は、自分の支配下にあったエルサレム神殿の金銀・宝石・財宝を差し押
さえてローマに売却しようと、側近をエルサレムに派遣します。
この時には、セレウコス4世の人望は全く地に落ちて、このままではダメになるの
が見えてるような状態でした。彼の意向を受けて、神殿から金を巻き上げるために
派遣した人物によって暗殺されるんですよ。セレウコスが。

**20 彼（アンティオコス3世）に代わって、一人の人（息子のセレウコス4世）が
起こる。彼は国の栄光のために、税を取り立てる者を行き巡らすが、数日のうちに、
怒りにも戦いにもよらずに滅ぼされる。**

あっけなく終わるという意味ですが、これは「なんぼ徴収してきた？」グサッ！
死んだということです。

彼の死後、その弟がシリアの王になります。
この人こそが、アンティオコス・エピファネス4世。反キリストのひな型です。
ユダヤの世界に最も酷い災いを振り下ろした、やがて現れる反キリストは、この人
そっくり。彼を無限大に大きくしたような人物。これは次回見ます。

皆さん、私の解説を聞いて、どう思われましたか？「あまりにも当たりすぎとるや
ないか。これはやっぱり、不信仰な学者が言うとおり、後から書いたんちゃうん
か」と言う人は、まさかないでしょうね。そうではありません。

実はここに書いてある内容は、実現したのを見て初めて解釈が成立するというくらい、内容的にはちょっと抽象的なんです。

「その軍」と言った時、どの軍を指しているのか分かりにくいんですよ。でも、実際に起こったことを見た時、「この文章の意味はこうなんだな」ということが分かるんですね。

さて、ダニエルはなぜ、こんなにも詳しい預言を書き残したのか。このエジプトとシリアの時代は、ユダヤ人の歴史の中で一番きつい時代なんです。エジプトが勝ってもシリアが勝っても、イスラエルは中間地帯にあるので戦場になり、酷い目に遭う。エジプトの支配下にある時も苦しい目に遭い、シリアの支配下の時も塗炭の苦しみを味わう。その中で、身の振り方をどうしたらいいのか。

彼らは預言を持ってたんです。「今回の戦争はエジプトが勝つぞ」「今度もエジプトが勝つぞ」「今回は2連敗しているシリアが勝つぞ」と、**ダニエル書 11章**をとおして知ることができたんですね。

つまり、今どのようにすれば生き延びられるのか、どう生きるべきなのか、この戦争はどうなるのか、創造主による答えを前もってもらっている。それで、彼らは倒れなかった。

ここに、聖書預言が書かれた目的があるんです。それは単に、当たってる・外れてるという興味本位なことではなく、聖書預言を読む人に希望を与えることです。この暴君、いつまで続くのか?! いや、彼はあっけなく終わると書いてある。だから、その時を静かに待つことができた。希望があるから耐えることができた。

ハツカネズミか何かを使った実験で、深い水の中にハツカネズミを落とすと必死で泳ぐけど、大体5分以内に沈むんです。溺れて。ところが、もう沈むという時に助けてやったハツカネズミで再度同じ実験をすると、60分以上泳ぎ続けるというデータがあるんですよ。泳いでいたら助かると一度経験したことが希望の灯となって…人間、なんでこんな残酷やねん。動物でも希望があれば生命力発揮するって、実験せんでも分かるやないかと思うんですけど。ハツカネズミの脳ってほんま小っちゃい。それでも、助かるかもしれないと思ったら、ものすごい力を発揮する。

助かるかもしれないじゃなく、100%必ず救済があることを約束しているのが聖書預言です。

イザヤ書 46章

10 わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。

これは、聖書預言が書かれた目的について、聖書自身が自己紹介しているんですね。1つも成就しなかったら、これは何の意味もないことばですよ。

だけど、わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げると書いてあるとおりに、記されたことが全て成就したことを見たら、これを書かせた神とはいったい何者なんだろうと思うんじゃないですか？

9 遠い大昔のことを思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのよう な神はいない。

世の中には宗教の神々、偶像の神々が溢れていますが、聖書の神のような神は一人もいない。この方は未来を見ることができ。だけでなく、預言したことばを必ず実現する方です。人に約束したことばを必ず守り切る方。

人を信用するかしないか、何によって決めますか？過去の実績じゃないですか？信用は積み重ねていくことで、初めて勝ち取れるものですよね。

時々裏切る人の言葉は信じられません。

聖書はずっと信用を積み重ねてきて、語ったとおりに人類歴史の中で成就したという書物です。つまり、聖書の神は額面どおり信じてよい。私たちが本当に信じるべきは聖書の神である、と言えるんじゃないでしょうか。

ぜひイエス・キリストを信じてください。

今はダニエル書 11 章ですが、ダニエル書 12 章、この預言の最後は死者の復活で終わります。人間の最大の問題は死ですよね。でも、人類歴史の最後に死者の復活がある。ある人は栄光に入り、ある人は忌み嫌う世界に入る。

善人も悪人もみな、神の前によみがえらされる時が来ます。

その詳しいタイミングは新約にならないと分かりませんが、キリストの地上再臨の時にそれが起こる。死の問題の解決がある。これが聖書が語っている救いです。

ぜひこの聖書の救いを受け取ってください。心からお勧めします。

☆*: .. 0 ...:*☆ ☆*: .. 0 ...:*☆ ☆*: .. 0 ...:*☆ ☆*: .. 0 ...:*☆ ☆*: .. 0 ...:*☆

引用文献；新日本聖書刊行会『聖書 新改訳 2017』いのちのことば社,2017